Ⅲ章　各教科の取り組み

国 語 科

1　育成したい「思考力」

a　論理的思考力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，既成の秩序の中で吟味する力
b　想像力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，五感を通して得てきた知識や経験と結んで自分の考えを創造する力
c　言語感覚：ことばの使い方の正誤，適否，美醜等について，直感的・感覚的に捉える力

a　「論理的思考力」とは

○　ことばとそれが指し示す意味において

そのことばの整合性を吟味することである。例えば『もうどう犬の訓練』（東京書籍，『新しい国語』三下）では，「『いっしょに町を歩く練習をします。』と，１か所だけ『練習』ということばが使われているが，これは訓練ではないのか。」「練習ということばには，訓練とは違った意味があるのか。」と，ことばのもつ意味の範囲と照らし合わせながら，ことばとそれが指し示す意味との整合性について吟味する思考である。

○　ことばとことばの関係において

順序や主張と根拠の整合性等，叙述相互の整合性について吟味することである。形式論理（帰納論理，演繹論理）は，この思考に含まれる。例えば，自分の意見を述べる際，「根拠として何を挙げればよいか」「事例としてふさわしいものは何か」と，話す内容を吟味するのがこの思考である。

○　ことばとその使用者において

そのことばの使用者の意図を捉え，その整合性について吟味することである。『森林のおくりもの』（東京書籍，『新しい国語』五下）には，木が長生きであることを述べている部分がある。その部分について，「筆者が，読み手のよく知っている例を挙げているのは，読み手の納得を得ようとしているからだ。」等，筆者の意図について吟味することがこの思考である。

次に載せるのは，「論理的思考力」（ことばとことばの関係を吟味する力）の例である。

第１学年「『じゃんけんやさん』をひらこう」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

勝ったり負けたりする三つのものを集めてじゃんけんをつくり，勝敗の仕組みやその理由を，友達によく分かるように順序立てて話す力

相互に勝ったり負けたりする三つのものについて，それぞれの勝敗にふさわしい理由がないとじゃんけんは成立しない。本単元では，その仕組みを理解しながら，オリジナルのじゃんけんをつくり，紹介し合う。子どもたちは，勝敗の仕組みに沿って説明できているか，勝敗の理由は誰が聞いても納得できるものになっているのかという視点で自分や友達のつくったじゃんけんを見直したり，確認したりしていく。その際働くのが「ことばとことばの関係を吟味する力」である。

b　「想像力」とは

○　ことばとそれが指し示す意味において

一語・一文を知識や経験とつなぎながら自分の読みを創造することである。『かさこじぞう』（東京書籍，『新しい国語』二下）に「じいさまは，ぬれて　つめたい　じぞうさまの　かたやら　せなやらを　なでました。」という叙述がある。その一文から「じぞうさまは石でできているから，さわると，きっと氷のように冷たいよ。」「ぼくは，『じぞうさま，こんなにつめたくなってつらかろうにのう。』と，じいさまがじぞうさまを思う気持ちを考えたよ。」等と，様子や気持ちを思い描くのがこの思考である。

○　ことばとことばの関係において

類似していることばや対比的なことばの関係を読んだり，文脈とことばの関係を捉えたりしながら，自分の考えを創造することである。『注文の多い料理店』（東京書籍，『新しい国語』五下）には，「金文字→黄色な字→赤い字」のように色が象徴的に用いられている。これらを比較してその意味を生み出したり，紳士の心情の変化と重ねて捉えたりするのがこの思考である。

○　ことばとその使用者において

叙述を根拠に書き手・話し手の意図等をつかみ，自分の考えをつくり上げていくことである。物語の主題を捉えたり，説明文における筆者の主張を読み取った上で，関連する本や文章から得た知識と結んだり，自分の経験と関わらせたりしながら，自分の考えをつくり上げていく際に働くのがこの思考である。この「思考力」の例を次に挙げる。

第５学年「新聞記事が伝えること」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

見出しや写真，本文を手がかりに，新聞記事の書き手のメッセージを捉える力

新聞記事に採用される写真は，毎日7,000枚ほど新聞社に送られてくるものの中から選ばれたものである。見出しはその記事の中心を短い言葉で表したものである。本文は，その記事を詳細に表し，出来事の全体像を伝える。このように「見出し」「写真」「本文」ともに書き手のメッセージが込められている。

本実践では，新聞記事を読み，「見出し」「写真」「本文」の三つに共通のメッセージを見つける。そうすることで，記事の根底に流れる書き手のメッセージを一層強く捉えられるようになるのである。ここで働くのが「ことばとその使用者について自分の考えを創造する力」である。

c　「言語感覚」とは

○　正誤

語の使い方や文の組み立て方について，言語規範に合っているか否かを直感的に判断・評価する能力。

○　適否

物事を適切に言い表しているか，場や相手にふさわしい表現か等，表現の妥当性や効果を直感的に判断・評価する能力。

○　美醜等

美しい・汚い，明るい・暗い，固い・柔らかい，重い・軽い等，あるいは軽快，重厚，優美，勇壮等，表現の微妙なニュアンスを直感的に判断・評価したり感覚的に味わったりする能力。

「言語感覚」に関わる「思考力」の例を次に挙げる。

第６学年「子ども句会を開こう」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

俳句作りにおいて，ことばを別の表現に変えたり，ことばの順序を入れ替えたりすることによって生じるニュアンスの違いを直感的に感じ取る力

俳句では，その短さゆえに，一つのことばの役割は大きい。また，ことばの順序も句のイメージ形成上，重要である。本単元では，そのような俳句の性格を生かし，句中のことばを類似することばに入れ替えたり，順序を入れ替えたりすることで生じるニュアンスの違いを感じ取っていく。

例えば，「手紙書くいっしょにとどけ虫の声」と「手紙書くいっしょに入れたい虫の声」とを比較して両者の語感の違いを感じ取ったり，「百ぴきが同じ向き飛ぶ赤とんぼ」と「赤とんぼ飛ぶ百ぴきが同じ向き」のようにことばの順序による句のイメージの違いを感じ取ったりする力が，「美醜等を捉える言語感覚」である。（掲載句は，「東京書籍，『新しい国語』六下，23頁」より引用）

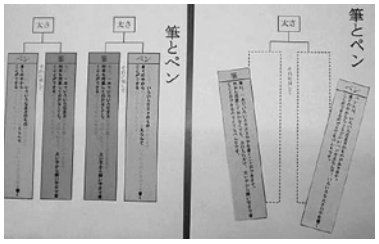
２　思考活動を保障するために

○　学習対象をいくつかの部分に分け，それらを子どもが選択できるようにする

第４学年「和と洋を比べながら書こう －『くらしの中の和と洋』－」では，大部分が「和→洋」の順で書かれている中で，部屋の使い方についての説明だけが，「洋→和」の順で書かれている理由について話し合った。そして，自分が書く際にも，全体に合わせた順序だけでなく，和と洋の内容のつながりに合わせた順序で構成した方がふさわしい場合もあることに気付いていった。

さらに，教師の示した例文を「和→洋」，「洋→和」のどちらの構成にする方が読み手にとって分かりやすいか，各自考えを明確にしていった。その際，例文を「和」「洋」同時に示し，文章の全体像を捉えられるようにしたシートと，「和」→「洋」，「洋」→「和」と事柄を一つずつ順に見られるようにしたシートを提示した。そうすることで，文章の全体を俯瞰して見ることが得意な子どもも，一つ一つを順に見ることが得意な子どもも，それぞれ自分に合った見方で，学習対象を捉えることができた。

その後，子どもたちは，読み手にとっての分かりやすさを吟味しながら，自分の書いた文章の構成を再検討していった。



【二つのシートを提示】

○　学習対象の変化の前後と，その間を明確にする

第６学年「物語と対話しながら　－『ばらの谷』－」では，三つの職人の物語を読んで考えたことを『読書新聞』にまとめていった。

初めに教科書教材『ばらの谷』を読みながら，本単元で繰り返す思考の手順「①登場人物や情景の大きな変化を見つける，②物語のメッセージを表すことばを見つける，③物語のメッセージを表すことばについて，感じたこと，考えたことをまとめる」を子どもたちと共有していった。

続いて『ルリユールおじさん』を読み進める際には，上記の思考の手順に沿ったワークシートを用意するとともに，それを黒板横のスクリーンに映し出し，今，どの活動が行われているのかを明確に示した。そうすることで，思考の手順を意識しながら物語のメッセージと心に残ったことば，そして，それについての自分の考えをまとめていくことができた。

【思考の手順に沿ったワークシート】

○　学習対象をまとめて配列するとともに，操作や表出等による作業化を図る

第４学年「物語の魅力をポップにのせて　－『ごんぎつね』－」では，物語をポップで紹介するために，あらすじを端的に表す工夫を見つけようとした。その際，友達の書いた二つのあらすじを並べて板書に提示した。子どもたちは両者を比較することにより，一つが「幸せな展開から悲しい結末に向かっていること」を，もう一つは「悲しい展開から幸せな結末に向かっていること」を伝えようとしていることに気付いていった。

この気付きを生かし，あらすじに書こうとしていた出来事が「悲」を表しているか，「喜」を表しているかという視点で見つめ直すようにした。子どもたちは，その視点から，あらすじとして取り上げればよい出来事を判断し，必要な出来事を精選して自分のポップに取り入れていった。

【二つのあらすじ例を並べて提示】

「想起，イメージ化」については，次頁以降の実践例で詳細を記載する。